東洋哲学研究所ヨーロッパ・センター講演会より

法華経と日蓮

末木文美士

はじめに

御紹介いただきました末木と申します。日本語でお話しすることをお許し頂きたいと思います。私は大学の頃少しフランス語を勉強しましたが、その後あまり勉強する機会がなくて、今回せっかくフランスに来るので少し勉強したかったのですが、日本の大学は大変忙しくてそれができず、皆さんとフランス語で会話をすることができなくて、たいへんに残念に思っております。お許し下さい。

今日はこうして大勢の方がお集まり下さいまして、仏教について一緒に考えていくことができますことを大変うれしく思っております。

先程司会をしてくださいましたベルトラン・ロシニョールさんは、私のところに留学して一生懸命勉強いたしまして、今はこちらで博士論文の準備をしているということですが、そういう形で真面目に仏教のことを勉強しようという若い方が出てきていることをうれしく思っております。

今日は「日蓮と法華経」について話すよう依頼を受けました。ただこれは非常に大きなタイトルでありまして、簡単に短い時間では論ずることのできない問題です。そんなわけで、与えられたタイトル全体について十分なお話をする事はできないであろうと思います。ですから、法華経をどのように理解するかということの方に話の中心を置きまして、必ずしも日蓮の方に話は進まないかもしれませんが、お許し下さい。

私は仏教の研究をしておりますが、特定の信仰の立場をとってはおりません。むしろ仏典を自由な立場から、既成の教義にとらわれないで自分の見方で読み直してみたいと考え続けてきています。今日はこのような立場から少し法華経というものを考えてみたいと思います。

一　法華経の伝統的解釈と近代の説

法華経は、日蓮が非常に重視した経典ですが、伝統的には普通、天台の解釈に従って理解されてきており、日蓮もまた基本的には天台の解釈に基づいて理解しています。

天台の解釈によりますと、法華経は大きく前半と後半に分かれまして、前半を迹門、後半を本門と呼んでいます。迹門の中心の思想は、一乗、つまり唯一の道という考え方です。それまでの仏教では、小乗と大乗に分かれ、そして、小乗の声聞とか縁覚とかいう人たちは本当の仏の悟りには到達できないと考えられていたのが、そうではなくて、みんな最高の仏の境地に到達できるのだという思想を説いているといわれます。

それに対して本門では、今度は説法している仏が、「従来の姿は実は方便の仮の姿であって、本当の仏の姿は、久遠実成、永遠の姿なのだ」と、仏の真実の姿を現したと理解されています。

このような伝統的な解釈に対して、近代になって、特に日本の研究者によって法華経の成立について様々に研究されるようになりました。これは特にサンスクリットのテキストが発見され、その研究に基づくところが少なくありません。

この近代の研究にはいろいろの説があり、必ずしも一定していませんが、一応共通する理解としましては、

法華経を三つの部分に分けるということが普通行われております。

その三つの部分というのは、第九章にあたる授学無学人記品までを第一部と考え、その後、第二十二章の嘱累品までを第二部として、それ以下の第二十三章以下を第三部と考えるというのがだいたい一般的です。

一般的な理解としては、第一部が一番最初に成立し、それから少し時代がたってから第二部が付け加わったと考えられております。第三部は、元々法華経とは別のところで行われていたいろいろの菩薩に対する信仰を、法華経の中に取り込んだものであると考えられています。

この分け方については、いろいろな根拠が挙げられますが、必ずしも絶対的な根拠があるというわけではありません。現在のサンスクリット本を見たときに、第一部と第二部、そして第三部のそれぞれの間で言語的に違うわけではありませんので、必ずしも客観的な証拠があるということはできません。

そのような理由から、最近では法華経が段階的に成立したという説を批判し、むしろ法華経は全体が統一的な構想のもとに、一度に作られたものであるという説を出す人もいます。私は、それぞれの部分で主張されている思想内容に、少しずつずれているところがあって、やはりその成立段階が異なっていると考えた方がいいのではないかと思っています。

といいますのは、全体を統一的なものと見ようとしますと、どうしても第二部の方に重点をおいて見られることになり、伝統的にいえば、迹門より本門を重視するという立場に近くなります。それに対して、私は、必ずしも第一部の方が優れているというわけではありませんが、第一部の方にはそれ独自の思想があり、第二部はそれをまた発展させたものと考える方がよいと考えます。つまり、第二部を主張するためにその前提として第一部を作ったのではなくて、あくまで第一部がまずあって、その後それをより進んだ問題へと発展させて、新たに第二部が書かれたと考える方がよいということです。

二　第一部の思想

そこで、今日は主に私が第一部の方をどう見るかということを中心にしながら、話を進めたいと思います。通常第一部は、その第二章にあたります方便品が中心であると考えられています。伝統的にも方便品が迹門の中心と考えられてきました。そこでは、従来の三乗に対して、唯一の仏乗、つまり仏になるという唯一の道があると教えているというのです。

そこで、私自身若い頃初めて法華経を読んだときの印象を申しますと、法華経というのは大乗仏教の非常に重要な経典であり、そして特にその第一部、あるいは迹門の中心の方便品では一乗の思想を説いているといわれて読んだのですが、実際に読んでも少しも感動しませんし、おもしろいと思いませんでした。

唯一の仏になる道があり、全ての人が仏になることができるといっても、成仏というのがよくわからない。私自身仏になってどうするのだろうか、仏になってもしかたがないではないかということで、成仏というのが実感として少しもわかりませんでした。

私には人間として様々な喜びがあり、また悲しみがあり、苦しみがあります。でもそうした人間としての様々な感情を持ち、人々と一緒に生きている。それが非常に素晴らしいことだと思いますが、仏になってそうした人間的感情を超越してしまったら、少しもおもしろくないのではないか。仏になったら、今度は人々を救うことばかり考えなければならない。私はもちろん人々のためにも役立ちたいと思うけれども、やっぱり自分としても楽しみたい。いつも人々のことばかり考えている仏なんて、おもしろくないのではないかと思いました。

この方便品の思想は、この次の譬喩品で有名な三車の譬え、三つの車の話によって譬喩的に説明されています。この譬え話は非常に有名なものですが、大きな商人である父親が、家が焼けて火事になったとき、三人の子供たちが家の中で遊んでいる、その子供たちを何とかして救い出したいと考えた。そこで、その子供たちそれぞれに、牛の車と鹿の車と羊の車をあげるか

ら、家から出てきなさいといって連れ出し、そして子供たちが出てきたら、三つの車ではなくて、非常に大きな立派な牛の車をあげたという話です。

ところが私は、この譬え話も少しおかしいと思います。子供たちが鹿の車とか羊の車がほしいといったら、その車をあげればいいのではないか。なにも子供たちがほしがらないそんな車を、いくら立派なものでもあげても仕方がないではないか。例えば、子供が自転車がほしいといったのに、その父親がお金があるから立派なロールスロイスの車をあげたとして、子供は喜ぶでしょうか。私はそうは思いません。

そのように法華経の大事な思想のところを読んでも、私自身あまり感動はしませんでした。しかし、その後幾度か法華経を読み直していくうちに、一般に重要であると考えられているところとは少し違うところに、非常におもしろい、私にとって印象の強いところがありました。

この譬喩品では舎利弗という仏陀の弟子がその話の中心になりますが、舎利弗というのはいわゆる声聞でありまして、自分はそれ以上先に進むことはできないと思ってあきらめています。ところが、仏陀から「おまえはもっと高い境地に進むことができるのだ」といわれて、やがて仏になることができるという授記、つまり預言を与えられます。

ちょうど私自身そのころ自分の能力の限界を感じて壁に突き当っていましたので、もうそれが限界かと思って絶望して、あたかも舎利弗と同じような気持ちでいたところ、そうではなくて、もっと先へ進み、もっと高い理想を求めることができるというふうに、非常に強く励まされました。

さらにその部分を読んで、私が非常に驚いたことは、仏が舎利弗に向かって、「私は実は過去の昔のたくさんの仏の時代にずっとおまえを指導してきているのだ。今回が初めてではない」といっていることでした。

非常に古いこの世に生まれる前、どれだけという年数か数えられない昔から、何万回、何億回と生まれ変わり、その間ずっと仏と舎利弗はお互い結びついていたのです。そして、舎利弗はその間ずっと菩薩として

高い理想に向かって進んでいたのですが、そうした過去を彼はすっかり忘れてしまって、今は低いレベルで満足してしまっていたのです。仏はそのことを舎利弗に思い出させるわけです。

このように、方便品で「成仏する」と抽象的にいわれていてよくわからなかったことが、譬喩品の舎利弗の話を読みますと非常によくわかってきます。つまり、ここで舎利弗の話で示されていることは、実は過去から現在そして未来へと続く非常に長い時間の中での話であり、単に成仏するということが問題なのではなく、むしろそうした過去・現在・未来という時間の中で、理想に向かって進んでいくという、そういう人間のあり方をいっているのではないか、そう私は思いました。そうやって理想に向かって努力している間には、時には絶望して挫折しそうにもなる。でも、常にその理想を思い出し、そして理想に向かって進んでいくことが大事だということです。

そしてまた、方便品でいわれていた「成仏」という未来のことよりも、むしろある理想に向かって進んでいく今のあり方こそ重要であり、それが菩薩と呼ばれる生き方ではないかと考えました。

三　菩薩と他者

そこで私は、菩薩ということに関心をもって調べてみました。菩薩という考え方は、原始仏教の最初の頃にはないものですが、いわゆるジャータカと呼ばれる仏の前世の話の中で展開されています。ではその菩薩というものをどう理解したらよいのかということですが、そのとき私にとって大きなヒントとなったのは、譬喩品の中で仏が舎利弗に、「自分はずっと過去の大昔から舎利弗と一緒にやってきた」といっていることでした。つまり、仏と舎利弗はずっと過去から現在、そして未来に向かって常に関わりつづけているという、その二人の関係が重要ではないかと考えます。

そこで菩薩という考え方が出てくる前の原始仏教の考え方を見てみますと、原始仏教においてももちろん悟りを求める弟子たちが共同体を作り、そしてお互い励まし合って悟りへの修行を続けていたし、また仏の

指導の下に修行を続けていたわけですが、しかし原始仏教の考え方は、原則的には一人で修行するということではないかと思います。

「サイの角のように歩め」という言葉がありますが、そのように悟りは自分自身が求めるものであり、それは誰か他の人との交渉の中で生まれてくるものではありません。もちろん原始仏教でも、あるいはその流れをひく今日のテーラヴァーダ仏教でも、社会的な関心を強くもっており、けっしてそういう人たちが独善的な自分たちだけの利益を考えているわけではありません。ただ私がいいたいのは、そうした原始仏教、あるいはテーラヴァーダの哲学では、その原理の根本に、共同性といったものがはいってこないのではないかということです。

それに対して、菩薩という存在はどのようなものでしょうか。菩薩の修行としては、六波羅蜜ということがいわれますが、やはりその一番重要な精神は、しばしばいわれるように、自行、つまり自分の悟りのために努力すると同時に、利他、すなわち人々のために尽くすということです。「人々のために」ということが入ってくるその原理が、菩薩の大きな特徴になるのです。

このような菩薩の理想というのは、もともとは誰でも簡単にできるものではありません。そこで、仏陀自身の前世の話として、つまり仏陀が普通の人にはできないような、人々のために献身的に尽くした話として展開してきたのです。やがてそれが一般の人々にも可能なことではないかと考えられるようになって、そこに大乗仏教が発生するようになります。

そこで私が思ったことは、他人のためにするという利他の行は、これは確かに理想としては高いことですが、しかし簡単にできることではありません。しかし、他人のためにするという原理をさらに考えると、その根底には、人間は自分一人では生きられない、つまり他の人と共存して生きていかなければならない、そういう原理を前提としていることに気がつきました。

菩薩というのが常に他人の為に自分を犠牲にする存在として考えられるならば、それは非常に難しいことであり、我々が容易にできるものではありません。しかし、菩薩とは他人と共存して生きていく存在であると考えるならば、あらゆる人は全て他の人と共存して生きていかなければならないわけですから、全ての人は菩薩であることが非常に納得のいくことになります。

このように見るならば、法華経の方便品で、あらゆる人は声聞とか縁覚ではなくて、実は菩薩であるといっているのは、つまり、全ての人は他の人と共存して生きていかなければならないのだということになります。それならば、法華経のいっていることは非常によくわかります。

つまり法華経の方便品の思想というのは、なにか非常に神秘的なこととか、あるいは形而上学的な難しいことをいっているわけではない。また、特殊な人にしか理解できない宗派的なことをいっているわけでもなくて、全ての人は他人なしでは生きてはいけない、他人との関わりの中で初めて生きていけるのだという、あらゆる人に共通した真理をいっているのです。そして、その他人との関係の中で努力していくこと、それこそが菩薩の道であるといっているのではないかと私は考えます。

他者との関係というのは必ずしもいつもプラスのことばかりではなく、そのために起こるいろいろと煩わしいこともある。ですから、むしろ他人との関係を切りたいと思うこともあるわけですし、声聞になりたいと思うこともあって当然だと思います。それでもやはり、最終的には人は何か理想をもつ限り、けっして一人では生きていけないと法華経はいっているのではないでしょうか。

譬喩品における舎利弗と仏陀の関係はまさにそのようなものの典型です。つまり舎利弗の存在は、何万年も何億年もずっと昔から、仏陀という存在——仏陀とは他者を象徴するものであるということができますが、そのような他者と関わり続けることによってはじめて現在の舎利弗があり、そして未来の舎利弗がある、そういうふうに考えられます。しかし、舎利弗はこうして仏陀とずっと関係してきているのですから、どんなに仏陀が立派であっても、時には仏陀がいやになったときもあると思います。ですから、舎利弗が理想を捨

てて声聞で甘んじようと思ったのは、むしろそうやって仏陀との関係を絶ちたいと思ったからかもしれません。

仏陀とその弟子の関係といえば、なにか非常に理想的に考えられますが、現実にはそこには人間同士の関係としていろいろな感情があったと考えられます。私自身、私の先生との関係など考えますと、非常に偉い先生であってもときにはいやにもなりますし、離れたいと思うこともありました。私の先生は田村芳朗先生といって法華経の専門家であると同時に、深い信仰をもった方でしたが、その田村先生が亡くなってみると、私にとって先生から与えられたものが非常に大きく、そして田村先生の教えられた法華経の重要性というものがわかってきました。このように先生との関係というようなものも、いろいろ複雑なものをもちながら、しかし離れられないものであるということを実感します。

このように私は、法華経をまさに仏と舎利弗を典型とするような、いわば他者との関係としての菩薩という点から読むことができるのではないかと考えました。

実は大乗仏教にはもう少し別の流れがあります。それは仏性という考え方です。つまり、あらゆる人は仏になる可能性を自分の中にもっているという考え方であり、だから人は仏になることができると考えます。この考え方は、全ての人は成仏できるという点で、法華経と似ていながら、重要な点で異なっています。

法華経の場合も、そのような仏性を前提として理解されることがしばしばありますが、しかし、仏性というのは必ずしも他人との関係を前提としないという点で、私が今述べたような法華経の発想とは非常に違ったものになります。

歴史的に見ますと、仏性という考え方は法華経より後になってからできたものであり、その仏性という考え方ができるために、法華経が大きな影響を与えたということは考えられます。しかし、法華経自身は、まだ仏性という考え方ができる以前の成立のものであり、仏性という考え方を前提として理解するのは適切でないと私は考えます。

今、譬喩品の舎利弗の問題を詳しくお話ししたために、すでに時間が残り少なくなりましたが、実はこの後法華経の第四章から第九章までの内容は、舎利弗以外の様々な仏陀の弟子たちに対して、仏が同じように授記、つまり仏になれるという預言を与えるという話が続いています。そこでは、必ずしも舎利弗のように過去からずっと仏陀がそれら弟子たちと関係していたとはいわれていない場合もありますが、しかし、様々な点から見て、舎利弗の場合と同じように解釈できると私は考えています。もう一度繰り返しますと、つまり私の理解というのは、人は仏になる可能性としての仏性というものがあるから菩薩であるのではなくて、むしろ過去から未来まで常に他者である、そして他者の象徴である仏陀と関係し続けているからこそ菩薩であるというふうに考え、そのように法華経の第一部を一貫して理解できるのではないかと考えるのです。

四　法華経の第二部と日蓮

では第一部はそのように考えることができるとして、法華経の第二部はどのように考えることができるかということが次の問題になります。これについては時間もありませんので一言だけで簡単にいいますと、第二部は仏陀が亡くなった後、いったい菩薩たちはどのように生きていくことができるかということを扱っています。我々が共に生きていく他者というのは、必ずしも生きている人だけではありません。それだけでなく、過去の人、既に亡くなった人たちも実は私たちと一緒に生きているのです。

生きている人との関係では、常にお互い議論をする事ができます。しかし、亡くなった人とは通常の形では議論をし、お互い相手の意見を確かめることもできません。そうした中で、どのようにして既に亡くなってしまった方の志を継いでいくことができるのかということは、我々にとって非常に大きな問題であろうと思います。

そのことは我々の身近で亡くなった人の問題だけではありません。もっと大きな歴史で考えれば、例えば、アウシュヴィッツの問題であり、そして我々日本人に

とって、戦争で亡くなった、そのために犠牲になった多くの人たちのことを考えていかなければならない問題です。

法華経の第二部というのはまさにそのように、他者の象徴としての仏陀が亡くなったあと、その亡き仏陀といかに語り合い、その意志を生かしていくことができるのか、そして菩薩としてどのようにして生きていくことができるのかということを、様々な形で模索していると理解することができます。

日蓮が最も重視したのがこの法華経の第二部のところでした。末法という時代、既に仏陀が亡くなってからずっと離れてしまった時代、その時代にあっても仏陀と語り合うことができるのか、その仏陀の精神を生かすことができるのか、それこそが日蓮が一生をかけて問い続けたことであったと思います。

既に時間になりましたので、その日蓮の話に関しては具体的なことにはこれ以上立ち入りません。中途半端で終わりますことをお許しください。ご静聴有難うございました。

（すえき　ふみひこ／東京大学教授）

（本稿は、二〇〇二年一月十一日に行われた講演内容に加筆いただいたものです）